

# 曹洞俳壇

選・村松五灰子

噴水の頂点に居る余生かな

青森県 中田 瑞穂

評 意表をつく戯画的な表現が気持やその立場からの睥睨の

さまが愉快に詠われた。あそびごころ彷彿である。

広き田の闇を背負ひて牛蛙

埼玉県 橋本 永子

評 子どもの頃は暗闇から低く響き来るそれは恐ろしい声に聞こえたものである。闇を統べる牛蛙「背負ひて」に迫力と深さがある。

◆ラバウルに見し紫陽花の色淡し 神奈川県 池亀 恵子

◆くちなはの岩から岩へ橋架くる 三重県 西村 廣視

◆迎火や形見の下駄を鳴らす道 愛知県 小久保左門

◆水鉄砲打たれ上手の母狙ふ 佐賀県 池内 淳子

◆どの家も車で参る展墓かな 山口県 中井 清子

◆天にゐる吾子下りて来よ虹の橋 静岡県 堤 千春

◆引退の灯台眠る月見草 北海道 杉山 桂子

◆風船で空へ飛びそふ乳母車 奈良県 鈴木 重雄

◆雑穀の御飯よく嘯む半夏生 愛媛県 井上 征郎

◆竹林の風も前菜夏料理 北海道 中西 千晶

\*選者吟

雲の影紅葉に光譲り行く

五灰子

\*作句小見

いつも楽しく真剣に皆さまの作品を拝見させて頂いております。当然のことながら、それぞれの生活空間の違いが句に詠み込まれていて毎回新鮮な響きを感じています。時折季題（季語）のない句があります。出来た一句を時間を置いて見直されますとすぐに気がつきま



# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

散る落ちる崩れる凋む零れると花それぞれ  
に終焉の辞  
島根県 横山 橐吾

評 日本語の語彙の豊かさが上の句の五つの動詞に表現される。即ち桜は散り、椿は落ち、牡丹は崩れ、朝顔は凋み、そして零れるのは萩の花。花の散り方ひとつにも日本人の繊細な感性の投影がある。結句には更に作者独自の把握が光る。

陽の没りて音色濃くなる祭り笛帰省の子ら  
も輪になり踊る  
秋田県 小田 崑恭葉

評 日没を迎えて祭が更に昂揚してゆく様子を捉えている。笛の音色が「濃くなる」という把握には、祭の本来の意味である神との交感をすら感じさせる。

- ◆幾万の太陽となりて飯館に向日葵咲けど人まばらなり  
福島県 大槻 弘
- ◆半畳の厨の隅に手折り来しえのころ活けて今日つつがな  
兵庫県 前田あつ子

◆旨さうに白詰草は広がりて放ちやりたし胸の仔羊  
岐阜県 後藤 進

◆満月の見守る尾道水道を西に東に小舟の走る  
広島県 小畑 宣之

◆この茄子を盆に飾らん朝夕の水かけ作業をよるこびとし  
山梨県 北村 富子

◆解禁日鮎の菓子買ひ供へれば遺詠の夫はほほゑみてをり  
埼玉県 橋本 永子

◆番らし二輪の夏鴨泳ぎゆくさざなみ二筋川面に残して  
千葉県 富野光太郎

◆玄関の絵馬は相馬の野馬がけかひばりが丘の嘶きを聞く  
岩手県 関合 新一

◆永遠に来ることなきかと思ふまで炎昼ひとりバス停に待  
奈良県 横井 正子

◆雑草も音に反応するようで夫婦喧嘩をすればしよけて  
東京都 野村 信廣

## \*選者詠

この夏の視力いよいよ衰えてついに無縁な  
忿怒の眼光  
ちづ

## \*作歌小見

一度失われた村落が復活することの難しさを大槻さんの一首は夏の向日葵に託して詠っています。異常気象等による災害がどこに起きても不思議ではない昨今、日常の営みを大切にしながらも大きな視野を持ちつつ詠いたいものです。



# 大本山永平寺



## 達磨講式

永平寺を抱く山々は、緑から赤や黄色へと色鮮やかに秋を迎えております。

祖山では、十月五日に「達磨講式」を営みます。

達磨大師さまは、インドから中国へお釈迦さまの坐禅をお伝えになりました。

達磨大師さまの語録を見ておきますと、どこを開いても三祖大師僧璨さまの「至道無難、唯嫌揀擇」のお言葉が、重ねて聞こえてくるようです。「唯嫌揀擇」とは、「ただ、分別や選り好みをしない」という意味です。

お釈迦さまのみ教えは代々に、漏らさず、濁さずに伝えられているのです。

嫡嫡と伝わるそのみ教えは、物事を真つすぐに見るといふ坐禅の姿そのものです。

さて、達磨講式に述べられます文言の中には「彼の西竺（インド）より一物も将ち来らず、云々」とあります。また、『永平広録』には、道元禅師さまが中国から日本に仏祖の坐禅を伝えられた時の「空手還郷」のお言葉があります。

達磨大師さまも、道元禅師さまも等しく、文字や知識ではなく、物事を真つすぐに見る「坐禅」を伝えられたのだなあと、お惚びする次第です。

坐禅道場の中心にあります仏殿には、お釈迦さま、そして達磨大師さまがお祀りされております。修行僧は、昼に夕べに仏殿でおつとめをし、坐禅を灯とした生活を誓い、温め続けているのです。



ご本山だより



## 大本山總持寺



### 御両尊ごりょうそんの御征忌会ごしゅうきえ

両大本山では開山忌かいさんきのことを「御征忌会」と申します。

總持寺の御征忌会は毎年十月十二日から十五日にかけて営まれ、全国から大勢の御寺院・檀信徒の方々がお越しになります。この御征忌会は、總持寺が石川県の能登にあった当初、二祖さん峨山さん禅師の御命日に当たる旧暦十月二十日に行われておりました。そして御征忌会が終わると、翌日には五院の輪番住職りんぱんじゅうしやくたちが交代する習わしでした。しかし、旧暦十月二十日は現在の新暦に換算すれば雪が降り始める十二月初旬であり、全国各地から上山する輪番住職たちにとりましては大きな負担となり、後に御征忌会の日程が御開山・瑩山禅師の御命日である旧暦八月十五日に変更されました。

新暦に換算すると十月初旬となり、これが現在に引き継がれているのです。このような歴史的経緯を踏まえ、總持寺では御開山さまと二祖さまのお二方を合わせて「御両尊」と申し上げ、「御両尊の御征忌会」を厳修ごんしゅうしているのです。

さて、修行の観点からいえば時節はもう「冬」。總持寺では既に冬安居制中に入り、正月明けまで集中修行が続きます。

また現在、石川県立歴史博物館で御両尊大遠忌事業の特別展「禅の心とかたち―總持寺の至宝」が十一月五日まで開催中です。お近くの方は是非御来場くださいますようお願い申し上げます。